

建設産業における

「ニュー・ノーマル」

の行方

株式会社 日本総合研究所
理事

山田 英司



Eiji Yamada

建設産業における「ニュー・ノーマル」とは何か

新型コロナウイルス感染の脅威が全世界を覆っている。国内においては緊急事態宣言解除後、徐々に活動が回復しつつあるものの、新型コロナウイルスが及ぼす社会的・経済的影響は長期に及ぶものと思われる。そして、コロナショックの影響は建設産業にも及ぶことは必定であろう。現に、緊急事態宣言時においては、多くの作業所で、感染予防を踏まえた環境整備を行う必要性に迫られた。

一般的には、今回の新型コロナウイルスはワクチンや治療法の確立まで時間がかかるとともに、第二波、第三波が襲来する可能性を考えると、新型コロナウイルスと共存しうる新たな社会・経済の枠組みである「ニュー・ノーマル」が形成されるといわれている。

また、長期に渡る社会活動の停滞による経済影響は甚大であることが想定される。当社の試算によると国内GDPが新型コロナウイルス前水準に戻るには二〇二二年度以降と想定される中で、建設投資自体も絞り込まれていく可能性が否定できない。更に、コロナショックでもたらされる行動変容は「ニュー・ノーマル」と称され、建設産業でも何らかの形で「ニュー・ノーマル」を模索する動きが起こるであろう。本稿では、建設産業における「ニュー・ノーマル」について私見を述べる。

それでは、建設産業における「ニュー・ノーマル」とは一体何であろうか。基本的には、新型コロナウイルスの感染と拡大を防止するために、接触機会を可能な限り減らすという考えのもとで再構成された「新たな建設プロセス」が定着することと解される。具体的には、施工現場での省力化・無人化などが挙げられ、その実現手段として、遠隔操作やセンシング活用、モジュール化に関する技術が注目されてお

り、今後の建設プロセスにおけるスタンダードになると思われる。また、施工以外にも、営業や設計、更には各種管理などのプロセスについても、リモート化の進展が想定され、更なる情報共有と活用が進むと思われる。

組みを前倒して進めれば、おのずと「ニュー・ノーマル」への対応につながるのである。

「ニュー・ノーマル」は建設産業にとって脅威なのか

とここで、これら「ニュー・ノーマル」に関するキーワードに対して、既視感を覚えるのは筆者だけであろうか。おそらく、建設産業に携わっている人は同様の感覚をお持ちだと思いますが、その理由として、これらのキーワードは、建設産業では新型コロナウイルス以前において、既に取組みが進められているものと共通しているからである。具体的には、技術者・技能者不足への対処や、他産業や諸外国と比較して低い生産性の改善を念頭においた、「i-Construction」などの取組みが現在進行形で浸透しつつあり、その観点では、アフターコロナの建設産業における「ニュー・ワールド」、これまでの取組みとオーバーラップする。つまり、これまでの取

ここまでは、建設プロセスに関する「ニュー・ノーマル」について論じてきたが、以降では、「ニュー・ノーマル」がインフラ・建設投資に及ぼす影響について考えてみたい。

確かに、コロナショックは日本経済に大きな影響を及ぼし、建設投資に対してネガティブに作用する可能性は低くない。特に、短期的な時間軸においては東京五輪延期などの直接的な事象が存在し、財政状況からの中長期で建設投資を予測すると、悲観的な声も少なくない。

他方、コロナショックがもたらす「ニュー・ノーマル」は、必ずしも建設産業にとってネガティブなものではない。なぜなら、「ニュー・ノーマル」への移行に際して、インフラそ

のものが大きく変化すると想定され、その変化は建設産業に対して、新たな事業機会を提供すると思われるからである。

具体的に説明すると、従来の社会・経済発展は、都市化による規模の追求と、それによる効率化の効果を享受するセオリーであり、その考えのもとでインフラが整備され、この過程で、都市化においては一定の「過密」が許容されてきた。しかしながら、コロナショックで状況は一転する。感染拡大防止の観点から、これらの「過密」は避けるべきものへと変化し、更に、リモートワークの進展により、相当の社会・経済活動が、都市でなくとも実施し得ることが明確になった。これらの、「都市集中」から「地域分散」と、「効率性」から「安全性」へのシフトは、旧来のインフラの見直しと再構築への動きを加速させる。通信・データ量拡大に対応し得るインフラの再整備や、在宅勤務やリモート環境に対応できる住宅・オフィス環境整備など、様々な建設需要がその中で発

生するであろう。つまりは「ニュー・ノーマル」は建設産業に福音をもたらす側面も存在する。その意味では決して脅威ではないのだ。

最後に

ここまでは、建設産業に訪れる「ニュー・ノーマル」について説明した。繰り返しになるが、「ニュー・ノーマル」は、ビジネスモデルの効率化を促しつつ、新たな事業創出の機会を得るという意味で決して脅威ではなく、むしろ好機であるといえよう。

そして、「ニュー・ノーマル」をプラス要因にするために、外部に対する提案力を高めつつ、内在的なプロセスを徹底的に再構築する。その過程で、リソースの見直しを行い、外部との協働を加速させる必要があるが、これは、平時から行われてきたことではないか。

過度に悲観的にならず、機会を確実に取り込むことで、「ニュー・ノーマル」を味方につけることが、今、求められていると考える。

過度に悲観的にならず、機会を確実に取り込むことで、「ニュー・ノーマル」を味方につけることが、今、求められていると考える。